

61 お玉が池種痘所の設立に参加した

上山藩医奥山玄仲

深瀬 泰 且

安政五年（一八五三）五月、江戸在住の蘭方医によって神田お玉が池に種痘所が開設された。この際に設立資金を拠出した八三名の蘭方医には、伊東玄朴や大槻俊齋、坪井信道などの当時の名だたる医師の名がみえる反面、今日ではその姓名以外には、出自も、生没年もまったく知られていない医師もいる。わたくしはかねてからお玉が池種痘所の設立資金を拠出した医師たちの業績について追求しているが、現在までにこの様なグループに属する医師は、八三名中いまだ九名（一一％）をかぞえる。今回は在来まったく名もない医師の一人として、歴史の舞台に姿を現していなかった医師の一人である奥山玄仲について報告する。

奥山玄仲はさきの総会で報告した明治初年の海軍軍医

寮の大医監奥山虎炳、大軍医奥山虎章の父にあたる。出羽国上山藩士奥山直清の長男として文化七年（一八一〇）八月六日にうまれた。直清はさきの例会で報告した奥山玄育（初代）の次男なので、玄仲は玄育の孫にあたる。

玄仲は義伯父（清満）夫婦の女と結婚してその婿養子となった。文政六年（一八二三）一四歳のおり、米沢に遊学する機会にめぐまれたが、その学問の内容——医学か漢学か——については明らかではない。年齢からみて、医学の研修も加味した遊学とかがえられよう。

米沢遊学をおえて帰藩し、文政八年（一八二五）五月には御勝手詰として召し出されて、二人扶持をうけた。文政十一年（一八二八）四月一九歳で養父清満の跡目を相続して八人扶持となった。この年六月には三ヶ年の医学修業のために江戸にでることを許されたが、翌文政十二年（一八二九）六月二五日には藩校天誦館の学校主事に任命されているので、江戸遊学はわずか一年にすぎなかった。江戸での医学修業の内容については不明である。

玄仲の長男虎炳は天保十一年（一八四〇）に長崎で出生しているので、玄仲は長崎遊学の経験があるとおもわれ

るが、これを裏付ける一次史料には接していない。

お玉が池種痘所の発足にあたって、その創設に協力した人びとはオランダ医学という絆で結ばれているのはもちろんであるが、伊東玄朴や大槻俊斎を中心に、師弟関係や血族関係にもとづく同志的結合によって糾合されたものがおおい。しかし奥山玄仲についてはどの様な関係からこれに参加したのかまったく不明であり、このような歴史的事件に参画したことすら『系図』には記載されていない。

種痘所設立に参加したことにより、種痘所や医学所に関係しながら芝赤羽根において開業医生活をおくったものと思われるが、江戸期の玄仲の動静を知りうる史料はとぼしい。

明治二年（一八六八）に新政府によって江戸市中六ヶ所に種痘所出張所がもうけられた。これは旧幕時代の出張所の復活といえよう。このとき小石川三百坂の手塚良仙宅とともに、芝赤羽根の奥山玄仲の自宅が出張所として牛痘接種の拠点となった。

明治九年（一八七六）奥山虎炳が海軍を退官してから父

玄仲の開業を手伝っているが、この場所は「芝赤羽根」である。また『東京医家雷名鏡』（明治一八年）には種痘家の欄に大野松斎とともに玄仲の名がみえ、その住所は芝「赤羽根」である。七八歳になった玄仲が、そのころもまだ種痘家として東都で名をなしていたということができる。

玄仲は明治三八年（二九〇五）一月八日に病没した。九六歳の長寿をたもった一生であった。

（順天堂大学医学部医史学研究室）